

研究ノート

社会学的エッセイ (その6)

— 批判的思考の実践 —

片 桐 新 自

Sociological Essays (6): Practice of Critical Thinking

Shinji KATAGIRI

**Abstract**

Sociologists often say, “Let’s doubt common sense.” Because it is an effective way of thinking to understand the functioning of the society, which the ordinary people don’t think about carefully. At present the mass media news plays a large role in forming “common sense”. The ordinary people tend to believe that the mass media news is true in spite of the time when it is easy to get access to a substantial amount of news content through the internet. It is necessary to critically interpret “common sense” formed by the mass media news as the first step to understand the functioning of the society. Such way of thinking is almost the traditional critical thinking.

Key word: critical thinking, mass media news, public opinion

抄 録

社会学者はしばしば「常識を疑ってみよう」と言う。それは、「常識」と思いこんで、深く考えなくなっている社会の仕組みに気づかせるための有効な思考方法だからだ。現代において、「常識」を創り出す上で大きな役割を果たしているのはマスコミ報道である。これほどネット情報が氾濫する時代になっても、まだまだ大衆は、マスコミ報道を真実と思い込みやすい。社会の仕組みに気づく第一歩として、マスコミ報道が創り出す「常識」を批判的に読むことが必要である。こうした思考は、伝統的な批判的思考に近いものと言ってもよいだろう。

キーワード：批判的思考、マスコミ報道、世論

はじめに

- 第1章 健康な人はマスクを外そう！(2009.5.22)
- 第2章 政治家の世襲制限について(2009.5.22)
- 第3章 男性専用車両が導入される日は近い(2009.6.26)
- 第4章 夏の甲子園への疑問(2009.8.5)
- 第5章 日本人は社会的には150歳まで生きる!?(2009.9.27)
- 第6章 軛の浦埋め立て差し止め判決に思うこと(2009.10.2)
- 第7章 00年代はどういう時代として総括されるだろうか？(2009.12.26)
- 第8章 知っていましたか？(2010.1.29)
- 第9章 トモダチコレクションってなに？(2010.3.29)
- 第10章 等身大の視点だけでは……(2010.4.25)
- 第11章 ひとりひとりが考えよう！(2010.4.26)
- 第12章 時効廃止って……(2010.4.27)
- 第13章 最近の結婚式に関する疑問(2010.5.9)
- 第14章 どこまで本気でやる気なのだろうか？(2010.6.18)
- 第15章 歌舞伎界にはなぜ甘いのか？(2010.11.26)
- 第16章 朝日新聞にがっかり(2010.11.28)
- 第17章 「タイガーマスク運動」を分析する(2011.1.14)
- 第18章 「チア」したい若者たち(2011.2.5)
- 第19章 官僚主導の政治に戻した方がいいのかもしれない……(2011.2.20)
- 第20章 菅バッシングをして何か事態がよくなるのだろうか？(2011.4.16)

おわりに

はじめに

この「社会的エッセイ」シリーズもこれで6篇目となります。今回は、2009年5月から2011年4月までの約2年の間に、私のWEBサイト (<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/>) で公開したものの中から、世論やマスコミ報道を批判的に読み、意見を述べたものを中心に選びました。小泉総理の登場以後、時代はポピュリズムに流れており、特にマスコミの大局を見ずに大衆を煽るだけの報道姿勢には非常に疑問を持たざるをえません。圧倒的な影響力をもつマスコミ報道に対して、ほんの小さな抵抗にしかすぎませんが、私のサイトを読む人々には、マスコミ報道とは異なる解釈がありうるのだということを示し、複眼的な視野を持ってほしいと思い書き続けています。

この2年の間には、2009年8月の政権交代、2011年3月の東日本大震災といった歴史に残るような大事件が起きました。この2つの大事件に関してもマスコミ報道には疑問を持ちたくなることがたくさんあり、WEBサイトではそうした意見も少なからず公開してきました。しかし、どちらも事態が日々流動しており、時間が経ってから掲載することにな

この研究ノートではその時々状況を理解してもらうのが難しい場合もあり、そういう可能性のある文章は選ばないことにしたため、その関連の文章はそれほど多くは入っていません。ただ、そうした事態が生まれていることは、陰に陽に他の事態にも関係してきていますので、読む際にこうした事態が起こったことを念頭に置いていただけると読みやすいかと思います。

各章タイトルの後に入れてある日付は、WEBサイトで公開した日を示しています。一応、公開順に並べていますが、個々の章は独立していますので、興味をもった章から読んでいただいても構いません。

## 第1章 健康な人はマスクを外そう！（2009.5.22）

新型インフルエンザのせいで、街中にマスク姿の人が溢れています。見ていて気持ちが悪いです。マスク信仰が異常に広まっています。いろいろな専門家が言っていますが、マスクは、予防効果は小さく、飛沫をまき散らさないためのものです。つまり、咳が出る人、具合が悪い人は、本来は外出を自粛してもらうのが一番よいのですが、どうしても出なければならない時に、そういう人が着用すべきものです。具合がまったく悪くない人は本来マスクをしなくてもよいはずですが、マスクをしているから感染しない、感染しにくいというのは、ほとんど科学的根拠はないようです。中には1人で車を運転しているのに、マスクをしている人がいますが、一体何のためのマスクでしょうか？こんなマスク信仰が流行っているために、街中からマスクが消えてしまっています。

ちょっと考えていただければわかるように、これは、納豆やバナナがダイエットによいと言われたら、街中から納豆やバナナが消えてしまったのと、まったく同じ心理にもとづく現象です。日本人のこの「右へならえ」的行動は、単に気持ちが悪いただけでなく、全体主義的な志向性が出ていて怖いのです。今回のマスク不足が納豆やバナナよりひどいことになっているのは、様々な企業や公共団体も深く考えず、とりあえずマスク着用を義務づける指示を出しているからです。私は「嫌咳権の確立を」（「KSつらつら通信」第126号、2004年1月29日公開、「社会学的エッセイ（その2）」『関西大学社会学部紀要』第38巻第1号、144-145頁、2006年）という主張もしている人間ですが、あれもみんながマスクをすべきだとか、予防のためにマスクをすべきだと言っているわけではありません。咳の出る人がどうしても外出しなければならない時は、ちゃんとマスクをすべきだと主張しているだけです。健康な人はマスクをはずして、日常活動に戻りましょう。施設も休校中だからと言っ

て一律排除は止めましょう。もうここまで来たら、日本の都市はほとんど新型インフルエンザの蔓延状態に入っていると言っても過言ではないでしょう。たまたま感染した人、感染者が多い地域や学校を、病原菌のように扱うのもやめましょう。まだ感染者が確認されておらずに気楽に構えている都市の方が危ない地域かもしれませんよ。感染者がいても普通に生活できる社会にしましょう。どんな病気の人があたって、社会はそれを受け止めながら動いていかなければならないのです。

## 第2章 政治家の世襲制限について (2009. 5 .22)

自民党が次の次の衆議院選挙から実施する予定だった、現役衆議院の親の地盤を受け継ぐ新人候補者に限り党公認候補としないという方針を、次の衆議院選挙から導入することを検討し始めました。はっきり言ってどうでもいい話です。無視してもいいのですが、それなりにニュースとして取り上げられていますから、そのしょうもなさについて指摘させてもらいます。まず、自民党の案ですが、まやかし以外の何物でもありません。現在のところこの措置によって公認がもらえなくなる候補は、小泉純一郎の息子の進次郎と、千葉1区の白井正一の2人だけですが、ともに公認はしないけれど、じゃあ他に自民党公認候補を立てるかと言えば立てないし、地元の自民党支部が彼らを応援することも禁止しないし、当選後は自民党に入党もできるそうです。まあ公認候補よりはお金の面など、いくつか厳しいこともあるでしょうが、少なくとも小泉進次郎は無所属でも99%当選するでしょう。そして、次回以後は誰からも文句を言われずに、親の地盤を受け継いだ世襲の公認候補として選挙にも出られるわけです。本当にしょうもない「制限」です。まあ民主党が世襲制限をしたので、自民党もやっていますよと主張するためだけに、菅（すが）義偉という、選挙のみに関心のある「政治屋」が考えついたものです。ちなみに、民主党の世襲制限も穴だらけでしょうもない制度です。

しかし、ここで私が一番言いたいことは、もっとしっかりした世襲制限にしろということではなく、世襲制限なんて別にしなくてもいいということです。というのは、世襲などというのは政治家の世界に限らず、ありとあらゆるところで当たり前のよう存在する慣習だからです。なぜ政治家の世襲だけ叩くのでしょうか。国の金を世襲でもらっているというイメージでしょうか。でも、選挙という洗礼をちゃんと受けているわけですから、その地区の代表としてはこの人でよいと有権者が選んでいるという正統性を彼らは持っています。それに比べたら、大企業などで創業者一家の人間がすぐに偉くなっていく慣習の方

をもっと批判すべきだと思います。もっと言うなら、天皇家の世襲だって批判しないといけないのではないのでしょうか。あげたらキリがないほど世襲制が社会の隅々まで浸透していることに気づくはずです。制度や慣習が長く存在し続けているとしたら、そこには社会を動かしていく上で、プラスの機能があるはずだというのが、社会学の考え方です。マイナスもあるかもしれませんが、プラスもあるはずです。そこを見ずに、感覚だけで批判するのは「百害あって一利なし」です。

「政治献金によい献金と悪い献金があるのだろうか？」（「KSつらつら通信」第320号、2009年3月7日公開、「社会学的エッセイ（その5）」『関西大学社会学部紀要』第41巻第1号、110-111頁、2009年）に書いたように、政治家の世襲というのは、本人の意思と言うより、利益誘導マシンとしての後援会が分裂・解体せずに、利益を確保し続けるために、後援会の強い意思で決めているものです。中には、やりたいと思う世襲議員もいるでしょうが、やりたくなかったのに無理矢理引っ張り出されたという2世、3世議員もかなりいると思います。それでもおかしいと腹を立てる人は自分が立候補すればいいのです。自分で政治家になろうとする気もない人が、世襲政治家はおかしいなんて言ったって、説得力も何もありません。

### 第3章 男性専用車両が導入される日は近い（2009.6.26）

女性専用車両ができた時に、半分冗談のように「男性専用車両もあればいいのに」と言っていたのですが、ついにまじめに検討される時期が来たようです。先日行われた西武HD（西武鉄道を傘下に持つ）の株主総会で、株主から「痴漢冤罪から男性を守るために、男性専用車両の設置を」という提案が出されたそうです。今回は却下されたそうですが、いずれ近いうちに、どこかの鉄道会社が男性専用車両を導入するだろうと、私は見えています。まったくそんな気がなくても、体が密着している満員電車の中で下手に体を動かそうものなら、あらぬ疑いをかけられてしまう（そして疑いをかけられたら、証拠は何もなくても逮捕される）ために、両手は上にあげて体は一切動かさないようにしているなんて話も聞きます。男性専用車両があれば、そんな窮屈さから逃れることができるわけです。別にみんながみんな男性専用車両に乗りたいとは思わないでしょうが、女性たちの不信の目から逃れのんびりと車内で過ごしたいと思う男性は少なからずいると思います。導入したら、今の女性専用車両よりも人気が出るのではないかと思います。もうそんな時代です。

#### 第4章 夏の甲子園への疑問 (2009. 8. 5)

朝日新聞をとっているために、最近毎日、高校野球の記事を読まされます。長い歴史のある大会でファンも多いと思いますが、私はかなり前から疑問を持っています。高校生のスター扱いや不祥事への対応など細かいことを言い始めたらたくさんあるのですが、ここではあまり誰も疑問として指摘していないことをひとつだけ指摘したいと思います。それは、8月の炎天下になぜ甲子園球場で大会を開催し続けるのかということです。「甲子園」と言えば、高校球児の夢の舞台で、負けたら「甲子園の土」を持ち帰るのが慣例になっているほど象徴的な舞台だということはもちろん知っていますが、灼熱の8月に厚いユニホームに身を包んで走り回ることの危険性を、なぜ誰も指摘しないのだろうかと思っています。他にやるところがないならともかく、今は大阪ドームなどを使えば、身体的な危険性は大幅に減少した状態で、この時期に大会を開催することも可能なはずですが。伝統だから、象徴的な舞台だから、といった精神的な理由だけで、甲子園で開催し続けることは、もっと問題視されてもいいと思います。

#### 第5章 日本人は社会的には150歳まで生きる!?(2009. 9. 27)

最近ちょっとネタ枯れ気味でもうひとつおもしろくなかった「たかじんのそこまで言う委員会」ですが、今日の最後の10分でやっていたネタは実に興味深かったです。それが、「日本人は150歳まで生きられるようになる」というテーマでした。最初は何を馬鹿なことを言っているんだろうと適当な気持ちで見えていたのですが、あっという間に「なるほど! それなら150歳まで生きるかもしれない」と思ってしまった。

どういうことかということ、医学が進歩して生物学的に見て150歳まで実際に生きられるようになるということではなく、「社会的」(実際番組で使っていました)な意味で150歳まで生きるという話です。まだよくわかりませんよね。つまり簡単に言うと、死亡届さえ提出されなければ社会的には死んだことにはならないということなのです。そして死んだことが確認されない限り、年金は支出されるのだそうです。この年金を受け取り続けるために、死亡届を出さないという家庭が実際にあるのだそうです。今日の番組で紹介された情報では、100歳以上の高齢者は4万人以上いると発表されていますが、それは住民基本台帳に載っている(死亡届の出していない)人の数で、本当にそれだけいるとは厚生労働省でも思っていないそうです。実際に生存が確認されている100歳以上の高齢者は約半分の2万人

強だそうです。

考えてみると、学校に通う子どもたちなどと違って、超高齢者は家族以外に会わずに暮らしている人の方が多いでしょうし、誰もそれを不思議に思っていないので、生きているのか死んでいるのかを確認するのは容易ではないようです。年金程度の収入でも貴重だと思っている家庭はたくさんありますので、このまま行けば、死亡届が出されずに、150歳まで生きている人が実際に出てしまう可能性があるという話でした。なるほどと納得してしまいませんか？私は納得してしまいました。こんな馬鹿なことが実際に生じないように、年に1回程度は役所から生存確認をしないとイケないですね。しかし、死んだ人を生きていることにして年金をもらう、それを防ぐためにお年寄りの生死の確認を厳しくする……なんだか世知辛い話です。

[注] この問題は、この文章をHPにアップした翌年の2010年夏に明らかになった東京都足立区の事例をきっかけに、全国各地で多数の事例が存在することが公表され、「消えた高齢者問題」として大きなニュースとなった。

## 第6章 鞆の浦埋め立て差し止め判決に思うこと（2009.10.2）

昨日、広島地裁で、鞆の浦埋め立て架橋計画を差し止めよという判決が出ました。新聞、ニュースで大きく取り上げられていましたので、ご存じの方が多いと思います。とりあえず、あの美しい景観を妨げる計画にストップがかかったこと、そして鞆の浦の歴史的環境が国民的財産であるという指摘がなされたことを喜びたいと思います。しかし、今回の判決は、差し止めを求め、現状を維持することの必要性を指摘しているだけのもので、よりよい保全のためのアドバイスなどは含まれていませんので、下手をすると、鞆の町はこのまま「凍結保存」あるいは「放置」ということになってしまうかもしれないという危惧の念も私は感じています。

今は、「ポニョ」のイメージが作られた港町ということで観光客も来ているようですが、「ポニョ」ブームなんていつまでも続きません。「トトロ」は狭山丘陵が舞台だと言われていますが、今はそのことをどのくらいの人知っていて、それを求めて訪ねて行っているのでしょうか。20年前から鞆に通い、鞆の素晴らしさを、機会あるたびに伝えてきた私としては、鞆がただのアニメの舞台としてだけ語られるのが残念でなりません。もちろん、宮崎駿という有名アニメ作家が関わりを持ってくれたことが、鞆の歴史的環境を守るために大きな意義があったことを認めるのにやぶさかではないですが、わずか4～5年前に初めてやってきた人に、鞆のことがどれほどわかっているのだろうと疑問に思います。今日の



朝日新聞に宮崎駿氏のコメントが掲載されていましたが、「不便を忍んで生きる」とか「あの程度の渋滞はどこでも起こっている」とか「歩いていて人に会わない町だからいい」とか言っていますが、なんかひどい言い方だと私は憤慨しました。その町で暮らしている人にとって、不便であること、歩行者も歩けないほどのひどい渋滞にしばしば出会うこと、そして人がどんどんいなくなることは、深刻な問題です。東京の郊外で心地よく自分の好きな仕事だけしている著名作家が、安易に語っていい言葉ではありません。軀にはまさに国民にとっての宝とも言うべき歴史的環境があることは間違いありませんが、多くの住民が不満と思う生活環境があるのもまた事実です。そのバランスを取らなければ、軀は長期にわたって素晴らしい町として生き続けられません。一切手をつけない保存ではなく、その価値を壊さない範囲で適切な改善を加えていく保全にすべきです。おそらく、原告団住民の方がその辺はわかっていることでしょう。これからの軀をどうしていくかに関する新しい計画案を作らなければならないはずです。

## 第7章 00年代はどのような時代として総括されるだろうか？ (2009.12.26)

もうじき2009年が終わりますが、ということは00年代も終わるということです。10年前の1999年12月31日から2000年1月1日に日付が変わる頃、私はテムズ川のほとりに家族とともにいました。100年続いた1900年代と1000年続いた1000年代が終わり、新たな「ミレニアム」が始まるということでおおいに盛り上がっていたことを思い出します。（「2000年問題」でコンピュータが誤作動すると言われていましたが、思ったほど何も起こりませんでしたね。）昔話はともかく（興味のある方は、私のHPの「ロンドン便り」第129号をお読み下さい）、今終わろうとしている00年代はどのような時代として総括されることになるのでしょうか。現在進行形で考えるのはなかなか難しいのですが、人は10年単位で時代をまとめて語りたがりますので、数年経てば、00年代は〇〇時代だったといった言説が世の中にあふれ出すでしょう。どういう時代として語られることになるのか、先取りして考えてみたいと思います。

まず参考のために、過去を振り返ってみると、40年代は「戦争と戦後の混乱期」、50年代は「復興と戦後政治体制の確立期」あるいは「高度経済成長の準備期」、60年代は「高度経済成長期」、70年代は「オイルショックを乗り越えた安定時代」あるいは「一億総中流時代」、80年代は「過剰な豊かさを追い求めた時代」、90年代は「失われた10年」あるいは「バブル崩壊の後遺症への対応時代」。さて、では00年代はなんと呼ぶのがよいのでしょうか。キ



ワードは、小泉純一郎、構造改革、格差、不安、政権交代、中国の成長などでしょうか。1955年に確立した政治体制、いわゆる55年体制（与野党の政党議席数のバランスだけでなく、政官財の「鉄の三角形」と利権誘導型政治の総称）の見直しやほころびは80年代後半から指摘され始めていましたが、バブル経済とグローバリゼーションの進展によって、完全に崩れ去ったことが誰の目にもはっきりしたのが、この00年代だったということになると思います。よく言われるように、小泉純一郎（や竹中平蔵）が登場したから旧体制が壊れたのではなく、彼らは時代の変化を見えやすくしただけの存在です。格差が広がり、不安定化する社会の中で、若者たちの保守化が進んだ時代だったような気がします。経済的には日本の衰退が明確になった時代としても、後に総括されることになるかもしれません。90年代は、「バブルのつけ」という一時的な「負の遺産」を回収しなければならないために、経済がうまくいかないのかもしれないと、みんななんとなく思っていました。00年代になっても国の借金が膨らみ続けている現状は、根本的なところに問題があり、日本がかつてのような勢いを取り戻すのは無理だということを自覚させられた時代だったのかもしれません。

しかし、無理にプラス成長に戻ることを求めずに、穏やかに衰退し、どこかで下げ止まりできるなら、それでもいいのではないのでしょうか。経済はよくならなくても、いやよくなならないからこそ、国民の政治関心・社会関心は今後高くなる可能性は小さくないようにも思います。経済が安定的な成長を続け、社会も安定していた時代は、国民も「誰が総理になっても一緒」「自民党がずっと政権与党でいい」と、社会について政治について深く考えずに、パワーエリートたちにすべてをお任せすることで済んでいたわけですが、こんな安定感のない時代に入ってくると、自分たち1人1人がちゃんと政治関心を持たないと、痛い目を見るのではないかという不安感も増してきています。政治や社会の動きをしっかり監視しようという空気は徐々に醸成されてくるのではないのでしょうか。

まあでも、この予測は少し早すぎるかもしれません。多くの人の目には10年代が終わる頃によくやく見えてくることでしょうか。で、「結局、00年代は何時代なのですか」という問いに答えないといけません。強いて言えば、「格差拡大と不安定化の時代」ということになるのでしょうか。要するに、1950年代半ばに確立した日本型安定体制の賞味期限が切れたことが明確になった時代という意味です。

## 第8章 知っていましたか？ (2010. 1. 29)

ほとんどの学生さんはすでにパケホーダイ（携帯サイト利用の定額制）にしているでしょうから、あまり関係のない話かもしれませんが、まだパケホーダイにしていない人には重要な情報です。パケホーダイに変更するにあたっては、その当日か翌月からしか変更できないと思っていませんか？というか、私はそう思っていました。パンフレットにもわかりやすくそう書いてありますし、ドコモショップでもそう説明を受けました。ところが、実は第3の選択肢があるのです。それは、変更日の前月まで遡ってパケホーダイになっていたことにして再計算をして差額分を返してくれるという、利用者にとって非常にありがたい選択肢なのです。うちも、パケホーダイにしていなかった妻が12月分でかなりパケット代を使ってしまったので、慌ててパケホーダイに変えたのですが、その操作を携帯上でやったときには、当日か翌月からの変更しか出てこず、この第3の選択肢に気づかなかったのですが、高額利用の通知葉書をじっくり見ていたら、そういう選択があることに気づき、ドコモ料金センターに電話をし、事情を説明し、12月からパケホーダイだった形に変更させることができました。これで、万を超える差額分が返ってくることになります。この一連のプロセスでいろいろ調べた結果、ドコモはずるいなあとしみじみ思いましたので、せめてここに書いて読んでくれた人には知らしめたいと思いました。

上にも書いたパンフレット（ドコモショップや携帯売場によく置いてある携帯電話カタログ）の2010年1月分を例にあげてみますと、53頁にパケホーダイについての説明があります。その右上の目につきやすいところに、「当日 or 翌月適用」という文言が四角で囲って強調されています。これだけ見れば、当然「当日 or 翌月適用」以外の選択肢があるとは誰も思わないわけです。「前月から適用にし、差額を返してくれる」というのはどこにも書いていないのかと探してみると、頁の下に読みにくいものすごく細かい文字で21行もの文章がありますが、その15～16行目にかけて、以下のような文章があります。「また、ご契約回線あたり1回に限り、前月から適用とすることもできます（その場合、前月から適用したものとみなして再計算を行い、翌々月の請求にて差額分をご返還します）。前月からの適用とする場合は、『ドコモインフォメーションセンター』またはお近くのドコモショップへお問い合わせ下さい。」こんなところ、普通誰も見ないですよ。携帯上で変更をすると、こういう選択肢があることは一言の説明も出てこず、当日か翌月のどちらかを選ばせるようになっています。その上、ドコモショップでも説明をしない（実は昨年娘がパケホーダイに変えた際には、携帯上でやらず、ドコモショップでやってもらったのですが、その際

に前月から適用という選択肢があることに関する説明をまったく受けなかったという経験をしています) のですから、気づくわけはありません。

いろいろ説明を聞く中で知ったのですが、この前月からの適用という制度は昨年4月から導入された制度だそうです。パケホーダイにしていなかった人で高額になってしまった人たちがたくさんいたようで、消費者センターに苦情を申し出たために、急遽前月に遡ってという、この制度を導入したそうです。しかし、これを広く知られると、多くの差額を返さなくならなくなるためか、この制度があることを大々的に宣伝していないのです。これはあまりにずるくないでしょうか。ドコモのような大企業が、利用者に有利になる情報を隠して儲けていることに、ひどく腹が立ちました。auやソフトバンクのシステムはわかりませんが、もしもドコモ利用者でパケホーダイへの変更を考えている人がいたら、この情報をぜひ教えてあげてください。なお、ほとんど携帯を使わない人にとっても、パケットあたりの単価が大きく違うので、パケホーダイにした方がほぼ間違いなく安くなるようです。結局、全員パケホーダイにした方が安くなる仕組みのようです。

## 第9章 トモダチコレクションってなに？（2010.3.29）

そのネーミングとCMを見ながら、なんか気持ち悪いなあと最近気になっているのが、「トモダチコレクション」（以下トモコレと省略）というゲームです。やったことがないので、あまり批判するのもいかなものかとは思っていますが、友人をコレクションするというそのネーミング、そしてその友だちが架空の友だちではなく、実際の友人・知人をバーチャルの世界のキャラクターにして楽しむというのが薄気味悪くて仕方がありません。実際に存在する友人・知人なら、現実に出て楽しめばいいではないですか。なんで、バーチャルの世界に入れてしまうのでしょうか。何がおもしろいのでしょうか。私にはまったく理解ができません。

しかし、トモコレはやっていないという人でも、SNS等で容易に会えない友人（あるいは会ったことのない人）の日常生活を簡単に知ることができるため、対面関係にある他者とのつながりを積極的に作ろうとしないという傾向は増大してきているように思います。関西大学社会学部では、1回生に基礎研究という少人数クラスを置き、友だちを作りやすいようにしてあるのですが、最近の学生たちから話を聞くと、同じ基礎研究のクラスだからと言って、特に仲良くなるためのイベント等はやっていないと言います。1年間同じクラスにいても、顔と名前が一致しない人も多いそうです。これも、携帯の中に、好きなト

モダチがコレクションされているので、身近に存在する他者とつながる必要がないということなのではないでしょうか。SNSのつながりは完全なバーチャル世界のものではありませんが、(長く)会ってもいないのに、その日常茶飯事の行動まで互いに知っていたりする関係というのは、半分バーチャル世界のつながりに似ているような気がします。そう言えば、mixiの「マイミク」って、コレクションした友だち一覧のようです。こうしたつながりかたに慣れている若い人たちにとっては、「トモコレ」は親しみやすいゲームなのかもしれませんが、生身の友人と集まって語る楽しさ、新たな仲間が現実が増えていく喜びを知らない人間ばかりになったら、日本はどうなるのだろうか、ひどく不安に思います。

## 第10章 等身大の視点だけでは…… (2010. 4 .25)

最近TVのニュースを見ていて気になるのが、人にばかり焦点が合わせられているように思えることです。徳之島でも沖縄でも壇上に立ち、米軍基地反対を訴える女子高生の映像が繰り返し流され、JR西日本の事故や明石歩道橋事故でも被害者遺族の意見が通って、いったん不起訴に決定したものが差し戻しになり、事故の時に組織のトップにいた人が再度裁判の被告になることになりました。他にも、裁判員制度の下では被害者(遺族)の立場への共感が強く出た判決が出る傾向があるようです。政治においても、鳩山だ、小沢だ、舛添だと人にばかり焦点が当たります。

人に焦点を当てると多くの人にとってわかりやすい構図が作れますので、こういう傾向が出てくるのですが、人だけに焦点を当てていても、実は問題の解決はできない場合がほとんどです。問題を起こしている根本原因は、社会や組織の仕組みであることが多いのに、それを個人の責任として還元してしまったり、被害者遺族の感情の慰撫のみに終始しては、問題の本当の解決はできません。社会学では、「鳥の眼と虫の眼を持つとう！」とよく言いますが、「人の眼を持つとう！」とはわざわざ言いません。それは、「人の眼(等身大の視点)」なら意識しなくても持てているからです。「鳥の眼」(大きな社会の仕組みを捉える視点)と「虫の眼」(普通は気づかずに見過ごしてしまうような小さなことにも気づく視点)は、意識しないと持てません。「見えないものを見よう！」という言い方をする社会学者もいますが、それも「人の眼」のみで見ているだけでは見えないものを見ようという意味です。

大きな資本力と取材力を持つテレビ局が、ただただ見えやすい人の視点ばかりでニュースを作っているのは、国民の思考力はますます落ちていきます。日本人は戦争についても人

が死ぬから決してやってはいけないといった程度の認識でいます。そういう視点しかなければ、逆に自分の家族などが殺されたりしたら、復讐心に燃えて、「戦おう！」と言い始めるのは明らかです。戦争も個人の視点だけで考えるのではなく、大きな国際関係の中でなぜ起きてしまったのかを知らないといけません。日本は先進国の中では珍しいくらいの「社会音痴」の国民にどんどんなりつつあるように思います。もっともっと社会学の視点が世間一般に普及する必要があると改めて感じています。

## 第11章 ひとりひとりが考えよう！（2010. 4 .26）

前章と同じようなテーマですが、マスコミ報道がひどすぎるので、再度書かせてもらいます。とにかく、普天間基地の移設問題に対する報道がおかしいです。鳩山総理が5月末までに移転先を見つけられずに、総理を辞任し、政局が動き始めるかどうかだけを楽しみにしているとしか思えません。国民ひとりひとりが自分で答えを出そうとせず、鳩山はだめだ、民主党はだめだと他人事のように言っているだけでは、「民主主義」とは言えません。日本は総理大臣に全権を委任して、国民は何も考えなくていい国なのですか？おかしいです。国民投票をやったらどうでしょうか。

以下の4つの問いを国民にぶつけてみたらいいと思います。「1. 日米安保条約は維持すべきか?」、「2. 米軍基地を日本に置くのは仕方がないか?」、「3. 沖縄ばかりに米軍基地を過剰に負担させるのは可哀想と思うか?」、「4. 自分の地元にも米軍基地は来てほしくないか?」ちなみに、この4つの問いにすべて「Yes」と答えたら、移設問題に対する解はありません。この4つの問いのどれかに「No」と答えないと、解は見つかりません。どこにNoを入れるべきか、国民ひとりひとりが考えるべきです。すべてに「Yes」と答えつつ、鳩山政権を批判するのは不当です。主権者である国民が当事者意識を持たずに、観客になっているのが、この国の政治のもっともだめなところですよ。そういう姿勢だったからこそ、「官僚天国」も生みだされてしまったのです。こんなことを永遠に続けるのでしょうか。私は、1か2に「No」をつけます。

そもそも、普天間基地の移設問題が出てきたのは、1995年に起きた米軍兵士の少女暴行事件がきっかけです。今時、刑務所ですら地方では誘致運動に積極的になる時代なのに、米軍基地がこれだけ嫌われる一因を作ったのは、繰り返されるアメリカ軍の風紀の乱れ、ルール無視が原因です。自衛隊基地ならここまで嫌われないでしょう。日本国民が批判すべきなのは、鳩山政権ではなく、もともとの不信感と問題を生みだしたにも関わらず、何

の反省もせずに、すべては日本の問題だといった顔をしているアメリカ政府です。矛先が間違っています。

## 第12章 時効廃止って…… (2010.4.27)

今日、現行25年の時効対象だった犯罪に対する時効が廃止され、即日施行（それも過去に遡って適用）となりました。被疑者遺族の感情を配慮すれば、25年でも短すぎるのかもしれないませんが、時効廃止というのは、制度として、将来にわたって運用できるのか、おおいに疑問です。時効がないということは、論理的には犯人が見つからない限り、100年でも200年でもその犯罪に関する資料を保存し、捜査を続けなければならないということになります。たとえば、もしもこの法律が明治初期にできていたとしたら、現在の警察が未だに坂本龍馬殺害犯を追い続けていなければならないことになるのです。どう考えても無理があると思います。現行15年、10年、5年の時効対象だった人を死なせた犯罪は、すべて時効期間が倍になりましたが、これは理解できますし、運用も可能でしょう。しかし、時効なしはどう考えても無茶な制度に思えてなりません。時効廃止ではなく、倍の50年にするというのが社会システムが運用できる、ぎりぎりの選択肢だったのではないかと思います。きっとそう遠くないうちに、時効廃止を撤回し、有限の時効期間を復活させる法律改正が行われることになるだろうと思います。

## 第13章 最近の結婚式に関する疑問 (2010.5.9)

最近の結婚式（挙式）はキリスト教式で行われるのが一般化してきており、私も結婚式（挙式）から参列することが多くなってきていますが、参列すればするほど疑問が増えています。素朴な疑問から入れば、なぜ神父は白人男性ばかりなのだろうかということですか。どう考えても、そんなにたくさんの白人男性神父が日本にいるとは思えません。特に、神父というのはカトリックの方の呼び名で、プロテスタントは牧師というそうですが、結婚式（挙式）では「牧師様の入場です」なんて言われることはないのです、みんなカトリックの神父ということになります。どう考えても本職の神父とは思えません。たぶん、あの人たちの多くは、教会とは関係のないアルバイト外国人ではないかと思います。

次に、その教会で披露宴をすることが多いのですが、なぜ神聖な教会に宴会場がついているのでしょうか。おかしくないでしょうか。「そんな杓子定規なことを言わないでくださ



いよ。あれが本物の教会ではなく、教会を形取った結婚式場だってことぐらい、先生、わかっているでしょ」と白けた顔して言われてしまいそうですが、ニセ教会で、信仰についてまじめに勉強したこともないアルバイト外国人の下で、信じてもないキリスト教の神に愛を誓うって、どうなんでしょうか。日本人ならもう少し疑問を感じてもよさそうです。神前挙式をした私も、別に神道信仰についてよく知っていたわけではありませんが、日本の土着信仰とも言える神道の神様の前で、日本の伝統的な方式（と言っても明治以降の習慣ですが）に則って誓詞を交わすというやり方でよかったなど、最近つくづく思っています。まあ今の若い人たち、特に女性たちが純白のウェディングドレスを着たいと思っており、それに似合うのが教会型結婚式場なのだとすることは十分理解していますので、今更、着物が基本の神前挙式にしないとは言いつもりはありません。しかし、結婚は人生における重要な節目の大イベントなのですから、あのウソだらけの設定にもうちょっと疑問を感じてもいいのではないかと思っています。

今時の若い人たちの嗜好性も配慮し、ウソだらけの設定を減らすためには、個人的には人前挙式がよいのではないかと思っています。教え子の結婚式で、1度だけ人前挙式に出席したことがあります。とても好印象を持ちました。もっと広まるのではと思っていたのですが、思ったよりも広がりませんね。適切な場所がないのでしょうか。パターンが確立できていないのでしょうか。パターンなら、確か婚姻届には2人の証人が必要だったと思いますので、その証人を代表として、家族・親族・友人の前で結婚を誓えばいいのではないのでしょうか。そんなに難しいことは要らないし、信じてもない神に誓うなどというウソもなくなるはずです。新郎新婦が「アルバイト外国人」を神の仲介者として、そちらに顔を向け、わざわざ参列してくれた人々には背中を向けたまま、信じてもない神に誓う姿を見、賛美歌などを無理矢理うたわされ、さらには見たくもないキスシーンを見せられるのは、個人的にはあまり楽しくありません。私としては、人前挙式にして、証人が横につき、参列者の方を向いてもらって、「証人である〇〇さんと〇〇さん、そして、みなさんの前で結婚を誓います。これから、2人で、みなさんから素敵だと思われるような家庭を作っていきますので、どうぞあたたかく見守り、応援してください！」なんて、宣言してくれたら、心からお祝いの拍手ができるのになあ、と思っています。

こういう結婚式の企画提案をするのはブライダル企業でしょうか。ぜひ、安易な教会風結婚式場を建てるのではなく、こういう人前挙式をやりやすい式場をたくさん建てて、こういう形式を普及させてほしいものです。いざとなれば、結婚式（挙式）と披露宴の2部制をやめて、最初から合体させてしまったりいいように思います。まあでも、簡単にこの

流れは変わらないかもしれませんが、いつの日か、私も花嫁の父として、「ニセ教会」のバージンロードを歩いているのかもしれませんがね（笑）。

#### 第14章 どこまで本気でやる気なのだろうか？（2010. 6. 18）

相撲界で野球賭博が蔓延していたことが明るみに出て、毎日のようにTVでたたいていますが、一体どこまで本気でやる気なのだろうかと首を傾げています。もちろん、野球賭博は違法で暴力団の資金源にもなっていますので、明るみに出た限りは批判せざるをえないわけですが、本気で調べ始めたら、力士や親方のかなりの割合がやっていたことがばれてしまい、相撲界の存続自体が怪しくなるほどの事態になります。暴力団とのつながりも相当根が深いはずで、相撲は地方巡業というのを定期的にやっていますが、こういう興業を仕切るのは、かつてはその筋の人たちの仕事であり、たぶん現在も様々な形で関わりを持っているはずで、名古屋場所を中止にすべきだという意見も出ていますが、場所を中止にすることが、一体どのような形で問題の解決につながるのでしょうか。まあ、数年前にあった野球界の契約裏金問題なども数人のしっぽ切りで終わりましたので、今回も名前が出た親方や力士のクビを切って終えるのがせいぜいでしょう。もしかすると、謹慎程度で済ませ、クビは切らないかもしれません。

しかし、おかしいですよ。野球賭博なんて、数十人の相撲界の人間だけで成立するわけはありません。日本中でたくさんの人が賭けているから成り立っているわけです。本気で野球賭博を罰するのなら、胴元を捜し出して、すべての客を処分すべきではないでしょうか。ものすごくたくさんの人が関わっているはずで、そもそも、ギャンブルの中に、合法なものや違法なものがあるのが不思議です。その基準は合理的なのかどうか大いに疑問です。同じように勝利チームを当てるサッカーのTOTOは健全なギャンブルで、野球賭博が社会的に批判される悪しきギャンブルになっているのは、単に法律的に認められているかどうかの違いに過ぎないでしょう。法的に認められていないけれど、人々が欲しがるものには、闇組織が必ず動きます。かつて、アメリカで禁酒法を作った時は、酒の製造・販売がマフィアの資金源になったのは有名な話です。もしも、野球を賭けの対象にすることが悪いのではなく、暴力団の資金源になっていることが悪いということなら、野球賭博も合法化してしまえばいいのです。公的機関が主体になれば、野球賭博もなんか格好いい名前のついたギャンブルに変貌し、健全な遊びとされることでしょう。もしも賭け事自体が悪いというなら、サッカーも競馬も競輪も競艇もみんな禁止にすべきです。でも、きっ

とできないですね。野球賭博を叩いているマスコミ関係者でも、一般化しているが実は違法ギャンブルであるパチンコの換金、賭け麻雀や賭けゴルフをしたという人は数え切れないほどいるはずです。

私はギャンブルには一切興味がないので必要悪だとまでは思いませんが、楽に金を儲けたいという大多数の人間の心理をベースにしているわけですから、どんな社会でもギャンブルを完全になくすことはできないと考えています。（株で儲けようとする人も、同じ心理で動かされているわけですから、資本主義社会の基本原理のようなものです。）こうした「濁」の存在に気づいてもある程度目をつぶらないと、社会の運営は困難になってしまうことは、みんな気づいていますから、マスコミもとりあえずニュースを流しながらも、本音では早く収束させたいと思っているような気がします。

## 第15章 歌舞伎界にはなぜ甘いのか？（2010.11.26）

市川海老蔵がどこかで殴られ怪我をしたという報道がなされていました。TVでは100%被害者のように報道されていましたが、記者会見を体調不良という名目でキャンセルして飲みに行って泥酔し、たぶん喧嘩になって殴られたということなのでしょう。もっと叩かれてもいいと思うのですが……。海老蔵という歌舞伎役者は確かに二枚目ですが、演技はあまりうまくないし、人間的にもできていないと、私の評価は低いものでした。今回の事件を聞いても、「やっぱり」というのが私の感想です。しかし、歌舞伎界には妙に甘い日本のマスコミは、海老蔵の怪我が治って復帰してきたら、批判はせずにあたたかく受け入れるのでしょうか。中村七之助（中村勘三郎の次男）が5年前に泥酔し、タクシーに無賃乗車し、駆けつけた警察官に殴る蹴るの暴行を働いて逮捕されたときも、3ヶ月謹慎しただけで、今は何もなかったかのように人気歌舞伎役者として活動しています。

なんで、マスコミは歌舞伎界にこんなに甘いのでしょうか。相撲界に対しては、日本の国技として、伝統的文化の担い手としてこれでいいのかという非難の大合唱で、気の優しいちょっとギャンブル好きだけだった大関・琴光喜を相撲界から永久追放させたくせに、余程人間的には問題のある人物を歌舞伎役者というだけで、こんなに大目に見てよいのでしょうか。一般の会社に勤めている人でも、七之助のケースなら間違いなく解雇、海老蔵のケースでも自主的に辞職させるか、少なくとも出世レースからは完全にはずして窓際族にさせるくらいの事件だと思います。結局、歌舞伎界がひとつのプロダクションのようなもので、歌舞伎界を怒らせたら、他の歌舞伎俳優もTVにも出演してくれなくなり、放送

局の方が困るといふことがあるからなのでしょう。ジャニーズ事務所関連の事件を大々的に報道しないのと同じ論理でしょう。ほとんどのマスコミも営利企業であって仕方がないと言え仕方がないのですが、そういう不公平な報道がなされていることを、われわれは常に意識しておかないといけません。

[注] 市川海老蔵は2011年7月の舞台から復歸した。

## 第16章 朝日新聞にがっかり (2010.11.28)

本日の朝日新聞朝刊を手に取り、愕然としました。1面5段抜きで、「小6読者モデル発信 ブログ交流数万人」という大見出しとその女の子がファッションショーに出演した時の写真が大きく掲載されていました。最初ぱっと見た時は、あまりの記事の大きさに、この女の子が事件にでも巻き込まれたのかと思っただけです。この記事は、社会面に続き、そこでさらに7段抜き写真入りの記事となっています。内容は、小学校6年生で雑誌の読者モデルとして人気のある女の子がブログで発信をし、それが同年代の女の子の間で大人気になっているという記事です。これは、「いま子どもたちはつながる」というシリーズ企画の1回目ということで、注目を集めるためにわざとやったのだと思いますが、知性を重んじるはずの朝日新聞がこんな記事を1面トップに置くのかと、正直言ってがっかりしました。

女子高生などを中心に「読者モデル」という存在が人気になってきたのはいつ頃からだったでしょうか。もう10年近くなるでしょうか。それが女子中学生、さらには女子小学生まで広がってしまったことは、ある意味仕方がないことでしょう。しかし、ネットの世界で注目されているからといって、大新聞が迎合するような記事を載せることにはもっと慎重になってもらいたいものです。マズローの欲求段階説にも社会的認知を求める欲求が入っているように、誰にもみんなから注目される存在になりたいという欲望はあるものです。しかし、そうなるための王道は、勤勉努力し、知識と経験を積むことだと私は信じています。もちろん、滅多にいないような外見的な美しさをもった人が、その外見で人々に認知されることはあるでしょうが、大多数の人にとっては、上記のような王道こそめざすべき方向です。特に、私のように教育を仕事としている人間からすると、勉強する癖をつけ、学ぶことの大事さを知らなければならない女子小中高生たちが、ただひたすらおしゃれとブログ発信のみに関心を持ち、そのことばかりにエネルギーを注いでいることに対してはどうしても批判的に見ざるをえません。フェミニズムが、女性も外見ではなく中身で勝負

させろと言いつけてきて数十年。今や、そんな初期のフェミニストたちの思いはどこへやら、「勉強なんか大嫌い。女の子はおしゃれでかわいくなきゃ」と、なんの疑問もなく主張する時代になっています。これでいいのでしょうか。

今回の記事を1面トップで掲載することに決めた関係者は、こういう批判の声が上がってくるのを期待して、わざとこういう掲載にしたと主張しそうな気がします。たぶん逆効果です。たぶん、この少女は朝日新聞の1面トップに写真入りで掲載されたことを自慢気に、またブログに掲載することでしょう。結果として何が起こるかと言えば、「こうやって、〇〇ちゃんのように、おしゃれでかわいくしていれば、マスコミにも取り上げてもらえるんだ。私もそうになりたい。学校の勉強なんかしている場合じゃない」と思う少女を増やすだけです。今の子供たちの実態を追うという企画ですから、こういう少女たちがいることは紹介する必要があると思いますが、1面トップはおかしいです。中の方の、「教育欄」や「家庭・婦人欄」あたりで取り上げるべき記事です。1面で語るべきことはもっと他にあるんじゃないでしょうか、朝日新聞さん。

## 第17章 「タイガーマスク運動」を分析する（2011.1.14）

みなさんよくご存じのように、現在マンガ「タイガーマスク」の主人公「伊達直人」をはじめとする匿名の人たちによる、児童養護施設へのランドセル等の寄付の動きが広がっています。たった1人の奇人な人の行動なら社会学的分析対象にはなりません、これだけ模倣行動が広がっていれば、十分社会現象と見ることができ、社会学的な分析対象になりますので、私も分析してみたいと思います。まず、こうした類似行動が多数発生している場合、「集合行動」の一種としてみなすことができます。集合行動がなぜ発生するかについては、社会学は十分な分析枠組みを持っています。ここでは、一番わかりやすいスメルサーの分析枠組みを利用することにします。スメルサーは、集合行動が発生するために、「構造的誘発性」、「構造的緊張」、「一般化された信念の成長と普及」、「きっかけ要因」、「参加者の動員」が順次そろわなければならないと述べていますが、今回の「タイガーマスク運動」の場合をこれに当てはめて考えてみましょう。

「構造的誘発性」としては、階層格差が小さく中流意識を持った人々が多い、それなりに豊かな社会であることと、マスコミ網が発達していることがあげられます。もともと寄付行為というのは、階層格差の大きな社会では上層が下層に対して行うものですが、今回の場合そうした形での寄付行為ではなく、数千円から数万円というレベルで行われている

ものであり、中流意識（そんなに豊かだとは思っていないが、自分たちはそれなりの生活をおくれている、世の中にはもっと可哀想な人たちがいるという意識）をもった層による行為と考えられます。こうした層が大量にいることで、今回の行動は広まりやすかったわけですが。また、マスコミによって、こういう行動があったことが克明に紹介されうるといっても、こういう行動をしようと人々に思わせる重要な構造的誘発要因だということもわかりやすいと思います。「構造的緊張」としては、最近の親子関係の不安定さがあげられます。児童虐待のニュースがたくさん報道されているため、庇護されない、親からの愛を与えられていない可哀想な子供たちが増えているのではないかと、彼らにわずかでも人の温かさを伝えてあげたいという「信念」をもつ人が、急速に増えているのだと思います。そうした環境が存在していたところに、最初の「伊達直人」が現れ、そのニュースがマスコミで報道されたことが「きっかけ」となり、人々はこの運動への「自主的参加」をしていったわけです。

次に、どういう人がこういう行動をしているのかについて分析してみたいと思います。私は、こういう行動をしている人たちは、すでに子育てから卒業した年齢層の方や、子どもがいない中年層などが中心ではないかと推測しています。というのは、自分に子どもがいて子育て真っ最中の人々は、こういう行動をほほえましくは見えていますが、自分自身の子育てをしっかりとすることこそ大事と考え、養護施設への寄付行為には向かわない気がします。ただし、大きく取り上げられるようになってからは、自分から報道機関に寄付をすることを連絡し、タイガーマスクの格好をして現れるなんて人も出てきていますから、ニュースで取り上げられることを楽しみにする目立ちたがり屋も含まれるようになってきていると思います。

なぜ本名を名乗らず、ヒーローの名前を借りて匿名でこういう行動をするのかについても分析してみます。2チャンネルで悪口を書くような社会的に非難される行動ではなく、賞賛されるような行動なのだから本名を出してすればいいのではと思う人も多いかもしれませんが、やはり匿名にしたくなるものだと思います。なぜなら、最初は単純に賞賛されても、すぐに必ずどういう仕事をしている人なのか、どういう生活レベルの人なのか、どういう経歴の人なのかといったことが、マスコミを通じて広く流され、プライバシーはなくなり、そのうち「偽善者ではないか」などという声もでてくるということが、高い確率で予想されます。であるなら、匿名で行動しようと思うのは当然でしょう。

最後に、よく考えてみると、善意の寄付行為や復興ボランティア活動など、これまでも小さな善意の行動は、日本でもたくさん行われてきています。こうした善意に基づく行



動を起こそうという気持ちを潜在的に持っている人は、この豊かな日本には少なからずいるということなのだと思います。マスコミやインターネットを利用して、こうした善意の行動に、うまく陽が当たるようにしてあげるなら、こうした善意の行動は一時的なもので終わらずに継続的に行われる可能性は十分あると言えるでしょう。

## 第18章 「チア」したい若者たち（2011. 2. 5）

奇妙なタイトルをつけましたが、別に「チアガール」になりたいと思っているという意味ではありません。大雪で困っている日本海側の町に、若者たちが雪下ろしの手伝いに行ったというニュースを見ながら思いついたことです。通常は「ボランティア」と言われている行為で、この雪下ろしの手伝いなどは、まさにボランティアと言ってよい行動ですが、日頃の若者たちの行動も合わせて考えていたら、ボランティアというより、彼らが好きな行動というのは、他者の応援なのかなと思えてきて、こういうタイトルにしました。

ゼミなどで学生たちを観察していても、自分の卒論執筆に没頭するより、なかなかうまく進まない仲間たちの卒論を応援してあげる方が楽しそうです。自分が主役になって、中心で頑張るより、頑張っている誰かを応援してあげたいし、その方が自分には向いていると思っている人が増えているような気がします。豊かな日本が生みだした戦うことが嫌いな若者たちは他者に優しいのです。傷つけてはいけないと言われて育ってきた若者たちは、的を射た鋭く厳しい言葉を発するのは苦手で、「頑張って！」とか「大丈夫だよ！」という甘く優しい言葉を発するのは得意なのです。頑張っていたサッカー日本代表チームを応援するのは楽しくて仕方がないのです。自分が舞台上に上がり、もしかしたら非難もされるかもしれないことはできる限り避け、下から支える役に回りたい、そんな若者が増えています。もちろん全員ではありません。サッカー選手もまた若い世代です。彼らは「一番になりたい」と思って努力しています。他の分野でもいることでしょう。でも、全体的に見たら少ない気がします。スポットライトを浴びるような仕事でなくとも、自分が主役になるんだというくらいの気力をもつ人が若い人の多数派であってほしい気がします。「チアしたい」より、「チアされたい」若者が増えないと、日本の将来が心配です。頑張れ、若者！われわれ世代が、若者を「チア」したいと思うような頑張りをを見せて下さい。

## 第19章 官僚主導の政治に戻した方がいいのかもしれない…… (2011. 2. 20)

約1年半の民主党内閣を見守ってきて、正直あきらめの気持ちが私の中にも広がりつつあります。しかし、それはマスコミ等で流されている「菅直人がだめだから」ということではなく、もっと根本的な問題です。政権交替が行われ、4年間は民主党政権のもとで、政治家主導による新たな政策が打ち出され、その評価が4年後の総選挙で出され、よければ民主党政権の継続、だめなら自公政権に戻ることになるという、本当の民主主義が根付く第一歩が始まると思っていましたが、まったくそうなりません。個々の政治家がだめだという以上に、たぶん制度・システムの問題からこうならざるをえないのでしょう。

まず、二院制であるために、ねじれが生まれます。自民党政権が永遠に続くかと思われていた時代に、民主党が参議院で多数派を取りねじれが生まれた時は、風穴が空いた気がしましたが、せっかく政権交替したのに、今のようにねじれが生まれてしまうと、政権交替の効果が非常に小さくなってしまいます。もともと二院制は階級社会の産物で、社会の中心を担う上層階級用の議会（日本ではかつては貴族院）に対して、庶民の代表が選ばれる議会（衆議院）が必要だということで、それぞれ存在意義があったわけですが、現代日本のような社会において、貴族院の後を受けた参議院にはもはや存在意義はまったくなく、二院制という制度はマイナスしかもたらしません。

次に、日本人はそもそも選挙という制度を受け止めるほどの人間になれていないのではないかということを目指したいと思います。今、永田町で政治家（「政治屋」と言った方がぴったりですが……）たちが起こしていることの多くは、すべて次の選挙で自分が落ちないためにはどうしたらいいかという発想に基づいた行動です。消費税増税策を打ち出したり、2009年のばらまきマニフェストを修正するのは、有権者にとっておいしくない話ばかりなので、有権者に嫌われ落選すると勝手に思っているような気がします。たぶん、一般有権者はそこまで「ばらまき金」を欲しがっていないと思いますし、消費税増税もある程度までは仕方がないと思っています。今、民主党の支持率が落ちているのは、マニフェストを変更しようとしているからではなく、党内があまりにもゴタゴタしているからです。こんな奴らに任せておけないという不安感が民主党離れを進めています。

では、有権者はそんなに大人かと言うと、そうも言えないと思います。消費税の多少のアップを認め、高速道路の無料化や子ども手当の無駄なばらまきはしない方がいいと答える人でも、自分の利害に大きく関わることなら、自分の利害を優先します。何よりも、政治を感覚的に見過ぎています。菅直人はオーラがない、官僚や公務員は優遇されすぎてい

る、小沢一郎は悪そうな顔をしている、石原慎太郎や橋下徹はカッコイイ、等々。大局的にモノを考えられる有権者もいるとは思いますが、少数派で、大多数は感覚的な判断のみで投票します。こういう有権者を前提とすると、政治家も大局より有権者向け、マスコミ向けのパフォーマンスのみに力を入れることになります。そのマスコミについては、同じようなことを何度も書いているので詳しく書く気も起きませんが、彼らが求めているのはニュースのネタです。小沢シンパの離党はあるのか、内閣不信任案は提出されるか、内閣総辞職あるいは総選挙はあるのか、次の首相は誰か、毎日そんなことばかり書いています。読者が社会の大局を考えたいようなニュースは目立たない小さな記事でしか書きません。

政権交替をしてもこういう風にしかならないなら、国民によって選ばれた政治家が政治を動かすという一見正統性のある政治家主導の民主主義をやめ、選挙で職を失わないので大局を考えやすい官僚主導の政治に戻した方がましだという気がします。明治時代に国を開いたばかりの日本があつという間に列強諸国に追いつくことができたのも、1950年代から1980年頃まで日本が急速かつ順調に成長を続けてこられたのは、選挙によって選ばれる政治家という存在がいなかったり、自民党政権が安定的に続いたりといった実質的に非民主主義的な体制のもとで、官僚たちが腕をふるうことができたからです。日本社会にとって、いやもしかしたらどの社会でもこういうやり方の方がましなのかもしれません。衆愚制という言葉を生み出したのは古代ローマの民主主義で、その後元老政治から帝政へと変わっていったという歴史もあります。チュニジアもエジプトも、民衆の感情的勢いに任せて、長く続いてきた安定的政権を倒してしまいましたが、果たしてその後よい社会が来るのかどうかはわからないと思います。民主主義も社会主義と同様、理念は素晴らしいが、現実にはうまくいかない制度なのかもしれません。政権交替のあるまともな民主主義社会に日本がなることを夢見ていた私が、今こんなことを書かなくてはならないのは、本当につらい気分です。

## 第20章 菅バッシングをして何か事態がよくなるのだろうか？（2011. 4. 16）

相変わらず原発事故が終息せず慢性的な苛立ちが日本を覆っている感じですが、そうした中で菅直人首相が批判的になっています。確かに菅直人の喋り方、表情はぱっとせず、大衆的な好感度を得られないのだろうなというのは理解できなくはないですが、はっきり言って叩きすぎだと思います。私は大震災発生後からこの間までの菅内閣はよくやってい

ると思います。情報もかなり出している方だと思います。でも、原発に対する科学的な根拠のない不安に囚われた人々は勝手に「悪い情報を隠している」と思いこんで批判をしています。すべての情報を出すことは困難ですし、確認が済むのを待ってから発表すれば情報が遅くなることもあるでしょうが、精一杯出している方だと思います。原発対応の初動が遅れたのは菅直人が視察に行ったからだとか、枝野官房長官ばかりに記者会見をさせているとか、原発周辺地域は10～20年は住めないと言ったとか言わなかったとか、とにかく揚げ足取りのような報道ばかりが続いています。私はいずれも菅直人を批判する根拠にはなりえないものばかりだと思っています。しかし、これを利用して菅直人を引きずり下ろして、自分の政治的立場を強くしようとする小沢一郎（最近の小沢一郎は「文化大革命」を始めた頃の毛沢東に重なって見えます）や自民党、公明党、そしてニュースとしておいしい政治家批判しか脳のないマスコミが煽り、ミーハー大衆がそれに引きずられ、「菅、やめろ！」の大合唱が起きつつあります。

しかし、よく考えてみて下さい。これで総理が代わったとして、原発事故が一気に終息しますか。するわけがないじゃないですか。菅直人が総理をやっているから、原発事故が終息しないわけではありません。そんなことは普通に考えたら誰でもわかることです。菅直人が総理をやめたら、自公も内閣に入って大連立内閣ができ、復興が進むという意見もありますが、誰が総理であろうと、こんな非常事態なのですから、本来挙国一致で復興を進めないといけないはずではないですか。それを「菅が悪い」「菅が総理だからだめなのだ」といった因果関係のまったくない批判をし続け、これでもしも総理が代わることになり、内閣を作り直すことになったら、いろいろな復興に向けての作業が中断してしまいます。むしろ、現在の非常事態がある程度落ち着くまでは、現政権にそのまま責任をもってやってもらうべきです。むしろやるべきは、国民の多くも支持していなかった2009年の民主党マニフェストを、非常時を理由にばっさり捨てて、少しでも財源を確保することです。「子ども手当」も「高速道路の無料化」も「高校授業料の無償化」も捨てるべきですし、ついでに「政党助成金」もなくし、「議員歳費」も半減以下にすべきです。政治家が痛みを伴う改革をやってはじめて「震災復興消費税」も理解されるでしょう。民主党内非主流派も自民党、公明党といった野党政治家たちもこの1ヶ月まったくよい仕事をしていません。必死で働いている現政権の足を引っ張るしか脳のない政治家こそやめるべきです。TVでコメントするキャスターもコメンテーターも政権批判しかしていないような輩は「百害あって一利なし」です。今は、まだまだ気持ちをひとつにして問題解決にあたるべき時期です。そのためにエネルギーを割くべきであり、倒閣や政権交替なんかにはエネルギーを割く

べきではありません。マスコミやネットの煽りに騙されないで下さい。

## おわりに

毎回同じようなことを書いていますが、初めて読む人もいるかもしれませんので、今回も書いておきたいと思います。こうしたエッセイ風文章を「研究ノート」として大学の紀要に掲載することには、疑問を感じる人もいるだろうと思います。地道な調べに基づく研究のみを研究と呼ぶべきだと考える研究者からすれば、こんなものを研究の一部として著すのは邪道だと批判されることでしょう。しかし当然のことながら、私はそうは思いません。というのは、社会学という学問は、どの学問以上に、時代に対して敏感であり、その分析と予測、そして時には提言をも、タイミングをはずさずになしうる学問であるべきだと考えているからです。事態が完全に収束してから「後付けの学問」としておもむろに「説明役」として登場するのではなく、事態が動いているまっただなかでも分析と提言のできる切れ味の良い道具として、社会学という学問を示してみたいと考えているからです。事態が現在進行形の時に分析・予測・提言を公表するためには、こういう刊行まで時間のかかる活字ではなく、WEBサイトの方がよりよいわけで、そのためにWEBサイトに随時掲載をしているのです。ただ、WEBサイトだけでは、将来にわたって残せるかどうかという点に不安があるし、また少し時間が経ったところで、現在進行形で行った分析・予測・提言を振り返り総括することもまた意味のある作業なので、こうした活字の形式での発表も行っているのです。